# 小原國芳の宗教を探る　その1

Speculation on Dr. Kuniyoshi Obara's FAITH No. 1

坪　田　庸　子
Nobuko Tsubota

目次

はじめに
Ⅰ．宗教的要求
Ⅱ．宗教の本質
Ⅲ．神とは
Ⅳ．イエス・キリスト
Ⅴ．信仰生活
} 次号に掲載

## はじめに

「小原國芳先生の宗教教育」（本学紀要第14号）の中で，私は小原の宗教観の概略を論じ，その後，彼の教育勅語観・労作教育・道徳教育と調べているうちに彼の信仰がいわゆるクリスチャンのものと何か異なった形のものであるような感じがしてきたのである。

その信仰は汎神論とも違う，その何か違う点について今回は探って行きたいと思う。信仰は個人的なものであり，その人と神との関係であるから，他人がとやかく言うべきことではないかもしれない。しかし，小原の宗教・信仰を探ることによって私自身の信仰の根拠のみならず，今年95周年を迎えた弘前学院の教育理念「キリスト教に基づく」という点が明確になってくるのではないかと思うのである。

このことのためにまず日本基督教団に属するキリスト者たちが告白しているところの信仰告白はいったいどういうものであるかということを見てから論を進めていきたいと思う。

「日本基督教団信仰告白[1]

我らは信じかつ告白す。

旧新約聖書は，神の霊感によりて成り，キリストを証し，福音の真理を示し教会の拠るべき唯一の正典なり。されば聖書は聖霊によりて，神につき，救ひにつきて，全き知識を我らに与ふる神の言にして，信仰と生活との誤りなき規範なり。

主イエス・キリストによりて啓示せられ，聖書において証せらるる唯一の神は，父・子・聖霊なる，三位一体の神にていましたまふ。御子は我ら罪人の救ひのために人と成り，十字架にかかり，ひとたび己を全き犠牲として神にささげ，我らの贖ひとなりたまへり。

神は恵みをもて我らを選び，ただキリストを信ずる信仰により，我らの罪を赦して義としたまふ。この変らざる恵みのうちに聖霊は我らを潔めて義の果を結ばしめ，その御業を成就したまふ。

教会は主キリストの体にして，恵みにより召されたる者の集ひなり。教会は公の礼拝を守り，福音を正しく宣べ伝へ，バプテスマと主の晩餐との聖礼典を執り行ひ，愛のわざに励みつつ，主の再び来りたまふを待ち望む。

我らはかく信じ，代々の聖徒と共に，使徒信条を告白す。

我は天地の造り主，全能の父なる神を信ず。我はその独り子，我らの主，イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり，処女マリアより生れ，ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け，十字架につけられ，死にて葬られ，陰府にくだり，三日目に死人のうちよりよみがへり，天に昇り，全能の父なる神の右に坐したまへり，かしこより来りて，生ける者と死ねる者とを審きたまはん。我は聖霊を信ず，聖なる公同の教会，聖徒の交はり，罪の赦し，身体のよみがへり，永遠の生命を信ず。アーメン。」

日本基督教団が成立したのは昭和16年（1941年）6月24日であり，信仰告白が制定されたのは昭和29年10月26日であるから，小原が受洗した鹿児島師範時代（明治38年4月～42年3月）にはあてはまらない。小原が『教育の根本問題としての宗教』の中で言っている，

「けだし吾人は絶対唯一の神を否定するものではない。……結局は万有在神論[2]まで進んでほしい。私の立場からは，神に祀られている個々の偉人の霊はこの絶対唯一の神の分身，分出，顕現と見たいのである。個々の偉人の霊に神性を認むるということと絶対唯一の神を認

むるということは必ずしも矛盾することではない。[3]」ということは，小原の宗教観の結論的なものなのであろうか。彼は宣教師ミス・ランシングの感化を受け，尾島真治牧師から受洗，生涯自らをキリストの弟子としての自覚を失なわなかったはずなのに，この「キリスト教の信仰と万有在神論とは矛盾しない」という考え方が小原は汎神論者ではないかといわれる所以であり，クリスチャンではない，といわれる所以となっているのではないだろうか。

それではキリスト教の神観から万有在神論へと小原の信仰は何をもって変化したのか，初めからそうであったのか，キリスト教の信仰と万有在神論は矛盾しないとする新しい宗教観をどのようにして育てられたのかを，小原の宗教観に大きな影響を与えたと思われる先人たち，特にシュライェルマッヘル，波多野精一，西田幾多郎の著書の中から見ていきたいと思う。

## Ⅰ．宗教的要求

宗教の要求は「実にそれは自己に対する要求である。自己の生命についての要求である。絶対無限の力に合一して，これによって永遠の真生命を得ようとする要求である。[4]」と述べており，さらに「ジェームズに『信ぜんとする意志』(Will to Believe)という名著があります。信仰というものは意志ではない。そんなものではない。やむにやまれぬ内からの要求なのだ。自然に湧き出る泉のようなものだと思っていたのが，この本を読んでみたら，ジンジンと信仰する心，生きる意志，勉強する意志という，健康になる意志，善人になる意志，美しい心を持つ意志ということを痛感するようになりました。[5]」といっている。自己に対する要求とは何か。自己とはそんなにも深淵なものなのであろうか。自己の生命は果して永遠無限なものとどこで結びつくのであろうか。

前述の小原の言葉は西田幾多郎が『善の研究』で語られているのとまったく同じである。それは「宗教的要求は自己に対する要求である，自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に，絶対無限の力に合一して之に由りて永遠の真生命を得んと欲するの要求である。パウロが既に『われ生けるにあらず基督我にありて生けるなり』といった様に，肉的生命の凡てを十字架に釘付け了りて独り神に由りて生きんとするの情である。真正の宗教は自己の変換，生命の革新を求めるのである。『基督が十字架を取りて我に従わざる者は我に協わざる者なり』といった様に，一点尚自己を信ずるの念ある間は未だ真正の宗教心とはいわれないのである。[6]」で，この中で引用されている聖句は，小原のクリスチャンとしての基盤となっているものだとして，鰺坂二夫がその著書『小原教育』の中に示している聖句であって，前者はガラテヤ人への手紙第2章　19～20節であり，後者はマルコによる福音書第8章34～35節である。

この宗教的要求は自己に対する要求であるという考え方はシュライェルマッヘルも『宗教論』で述べている言葉である。少々長くはなるが何故我々が宗教を求めるかという深い意味が言い表わされているので『宗教論』から引用してみよう。

「諸君の御承知のように神は不変の法則に従って自己を強制し，その偉大な創作を無限に至るまで二分し，あらゆる一定の存在をば互に拮抗する唯二つの力の融合から成立させた。従って神はその永遠の思想をもすべて，これを二つの互に相戦いつつも而も互にその相手によってのみ存立するところの，分ち難い雙生児の姿で実現させたのであった。かかる物体的世界全体の真只中に迫ること，それは諸君のうちの最も良き教育を受けた者，最も考え深い者にとっては，相反する力の永遠に止まるところを知らない戯としか思われないだろう。一切の生命は，不断の摂取と反撥の結果に過ぎないし，あらゆる事物は，自然の二つの根源力，即ち渇ける如き自己吸引力と活気漲る自己拡充力とを特殊な仕方で相結合し且つ固持することによって初めて一定の存在たり得る。精霊と雖もこの世界に移植されるや否やかかる法則に従うべきもののように思われる。あらゆる人間の魂は，――その一時的作用もその存在の内的特性も，何れもかく思わしめるが――二つの相拮抗する衝動の所産に外ならない。一つの衝動はその魂をとり囲むすべてのものを自己のもとに引きよせ，これを自己の生命のうちに織り込み，できることならこれを自己の最も内的な本質のうちに全部吸収しつくそうとする努力である。もう一つの衝動は，人間の魂自身の内的な自我を内から外へと愈々拡張し，これを以て一切を貫ぬき，一切にこれを頒ち与え，而も自らは決して涸渇すまいとする願望である。前者の目ざすのは享楽であり，自己のもとに屈服するところのものを一つ一つ己がものとしようと努力する。従ってこれらの一つを捉えるとその活動はしばしば一時鎮静するが，やがてまた次のものにと向ってただ機械的に働きかけて行くのを常とする。後者はこうした享楽を軽蔑する，そして専ら成長し且つ向上してゆく活動にのみ向う。従って個々の事物，個々の現象には目を留めようとしない。と云うのはこの衝動はそれらのものを貫くものであり，而もそれが到るところで発見するところの力と実体とは，その衝動力を破壊するものに外ならないからである。その衝動が欲するところは一切を浸透し尽し，一切のものを理性と自由とで充満することである。かくして

この衝動は，まっしぐらに無限者へと向い，到る所に自由と連関，力と法則，正義と適合を追求するとともにまたこれを実現して行く。[7]」

ここに小原がいつも言っている反対の合一，ブルノーがいっているという反対の合一（coincidentia oppositorum）が明らかにされたのではないだろうか。私たち，人間がなぜ，いつも相反するものに対して煩悶しなければならないかということも理解されるのではないだろうか。私たちが生きているということ，そこにはいつも二者択一の選択が要求される。そこから，宗教を求める心が自ずと湧き出てくるのではないだろうか。このことに関してシュライェルマッヘルは言及している。

「宗教が各人の優れた心の底から自づから必然に湧き上がること，宗教が無制限に支配権を振う固有の領土は心情のうちにあること，そしてその最も内なる力によって最も気高い人，最も秀でた人を感動させ，その内的本性に応じて認識されるにふさわしいものがあること，このことを私は主張し，また喜んで確信したい。[8]」

宗教は心の底からの要求であることは小原が繰り返し言っている，「宗教は吾人生命の要求である。[9]」と，このことはさらに西田の考えと同じである。小原は西田の言葉を引用して宗教的要求という彼の節をしめくくっている。

「世に往々何故に宗教が必要であるかなど尋ねる人がある。併しかくの如き問は何故に生きる必要があるかというと同一である。宗教は己の生命を離れて存するのではない，その要求は生命其者の要求である。かかる問を発するのは自己の生涯の真面目ならざるを示すものである。真摯に考え真摯に生きんと欲する者は必ず熱烈なる宗教的要求を感ぜずには居られないのである。[10]」

宗教は一個の人間として自己の有限さに気づいた時に無限へと飛びたとうとする要求，欲求であり，そのたどりつくところの目標ではないだろうか。自分の有限さに気づくということは自己の何たるかを理解することであり，自分の存在の意味を考える時であると思う。

波多野精一も言う。「宗教は理性的価値に絶対的実在に於ける基礎を与えるところのものである。それ故に人格的生活の最深き要求，最高き理想に実在的根拠を供する点に於て，宗教は人格を成就し，人格を完成する。[11]」

結局，宗教は聞いたり，教えられたりするものではなく，個々の人格のうちに，それぞれが体験することによって理解するものであり，それぞれが心の奥底で宗教の必然性を感じとるものであると思う。

## Ⅱ．宗教の本質

小原は言う，「逆境を感謝し，貴き試練と思い，不幸即恩寵，患難即感謝との境地が実に宗教の極致なのである。[12]」この不幸を恩寵とし，患難を感謝とする境地に至るその直観と感情について，シュライェルマッヘルもまたそれこそが宗教であるとしている。即ち，「宗教の本質は，思惟でも行為でもなく，直観と感情である。宗教は宇宙を直観せんとし，宇宙自身の表現と行為との中に在って，敬虔の念を以て宇宙に耳を傾けようとする。宗教は小児のような受身の態度で，宇宙の直接の影響に依ってとらえられ，充たされようとする。[13]」と言っているが，この宇宙との関連は西田幾多郎が言っている「宗教とは神と人との関係である。神とは，種々の考え方もあるであろうが，之を宇宙の根本と見ておくのが最も適当であろうと思う。[14]」という宇宙と同じなのであろうか。

シュライェルマッヘルの宇宙は一見したところ，キリスト教の唯一の神とは違うようにとられる。キリスト教の場合，神を宇宙の背後にある創造者と自分というふうにとらえるのではないだろうか。西田幾多郎の場合の神が宇宙の根本であるとする，その宇宙の根本を創造者と考えていると理解すればよいのであろうか。

シュライェルマッヘルも小原もキリスト者であることにはちがいないのであるが，何故二人とも宗教の本質を絶対者なる唯一の神と限定しないのであろう。

「宇宙は間断なく活動し，我々に各瞬間に自己を啓示している。宇宙が産出するあらゆる形式，宇宙が生命の充実に従って各々別個の存在者，宇宙がその豊富にして常に多産な胎から注ぎ出すあらゆる出来事は，宇宙の我々に対する行動である。かくしてすべての個物を全体の一部として，すべての制限されたるものを無限なるものの表現として受取ること，それが宗教である。[15]」無限なるものの表現，個々の人間であれ，自然であれ，被造物として認識すること，創り主と造られた者とがあるということ，即ち神と人との関係，そして，クリスチャンであるならば，その造られた者として感じとること，仲介者としてのイエス・キリストがいつも戸の外から扉をたたいていることに気がつくこと，そこに宗教（信仰）が生れるのではないかと考える。

「宗教の世界は，個物がその本来の意味で生き，人格が独立した存在として存在理由を有ったところの世界であって，スピノザの汎神論的立場とは本質的に異種の立場に立つものといわなければならない。人は如何にして宇宙を知るのか。我々の現実の生活の中には一つの瞬間がある。その一つ一つの有限的存在が無限の意味を有ち，偶然的時間的出来事が永遠性を帯び現れる瞬間である。[16]」この中で汎神論者ではないかと誤解を生むようなことをシュライェルマッヘルは言う，

「宗教は，信じ且つ感じている人々を一つの信仰，一

つの感情の上に捉えようとはしない。勿論，宗教は，宇宙を直観することがなおできない人たちの目を開いてやろうと努力する。[17]」であるからして，宗教をキリスト教と限定することはできないし，限定する必要もないことである。

宗教はこの自分が被造物であることを知ることである。小原がシュライェルマッヘルの「絶対帰依・依属感情」を強調しているが，これは「私たちの被造者感情と同じである。[18]」とR.オットーは彼の著書『聖なるもの』でいっている。R.オットーによるとこの被造者感とは「畏怖の感情」であるという。さらに，「客体的に感じられる優越に対し，自分の空虚，無価値，塵であり灰であり無であると感じることにほかならない。かつ宗教的『謙遜』のいわばヌウメン的素材である。[19]」「この依属感情を私以外の源に導き考えつつ帰納して初めて，人は神的なもの自身に出会うことになるだろう。[20]」ということが言われている。

私たちはこの被造物としての連帯感から愛を実践することになるのではないだろうか。

被造者だから創造者に依属している。被造者の存在は創造者なる神の存在に依存しその存在の一部である。この被造的存在は，創造者に自らを支えられる存在（現存在）を感謝することだけである。感謝に始まり，讃美に終わる。従って人間は神と矛盾し，自己と矛盾し，感謝と讃美を失なう。これは罪の最大のものであるが，人間からは自分からは克服できない。それを克服できるのは聖霊の神の行為のみであり，それは奇蹟であり恩寵の奇蹟である。私たち神を受け容れ，肯定し，感謝することは私たち自身のわざでなく，聖霊の賜物である。

シュライェルマッヘルも西田幾多郎も宗教の本質を「知と愛」として一章にまとめ上げているが，この愛の実践こそが宗教をとらえたものの生活であると思う。

「宇宙直観の機会は生活の到るところに見出すことができる。生活の中には『無限に向う幾つかの通路，切り開かれた展望がある。何人ものこ前を通過することによって，彼の感能が宇宙に至るべき道を発見する。』（R153）[21]こうした通路は自然よりむしろ人間性 Menschheit の発見にある。もとより人間性そのものは宇宙ではないが『人間性と宇宙の関係は，個々の人間と宇宙の関係と等しい。』（R104）人間性（そしてそれはやがて宇宙の発見であるが）は個々の具体的人間との現実的人間との現実の関係において捉えられる。[22]」さらに，「自我以外の確実な存在を知らない孤独な人間，一切の存在を自我の所産と考える観念の世界では宇宙を見出されない。従ってそこには宗教は存在しない。……しかし彼が『愛において又愛を通して』自己の前に立つ真の人格を見出す時，彼はもはや単に偶然な一個体ではなくして必然的人格である。彼は人間性の又さらに広くは宇宙の必然的契機でなければならない。即ち彼は自己と全く相反する汝との自己同一性を自覚する時に既に人間性を発見し人間性に立っている。人間性の発見なしに私と汝との自己同一性の自覚は存在しない。そして彼は自己の人間たる存在，即ち人間性を発見することに依って真の個体，真の人間となるのである。人間性の個体的限定としての自己の存在の自覚はやがてまた宇宙の発見を意味する。彼はこの具体的な汝において彼等の創造主たる神に相接しているからである。宇宙を直観する者は，自己の被造物たることを知る者でなければならない。[23]」この人間性については小原が最も強調している部分である。

「真剣に生きようとする人には，いくら宗教を不必要にしようとしても不必要にすることが出来ない。生命の必然の要求であり，否な生命そのものであるから。人間内部の事実であり，外から借りて来て附加されたものでないから。人間内部の本質に必然的に存在する事実であるから。だから一面からいえば，真の人間になることである。シュライェルマッヘルのいう如く，「人」になることである。真の宗教をつかまんとすることは真の「人」になることである。先ず「人」を見出すことである。[24]」さらに「「人」にまで進むためには，神を承認せずには，神なしには，宗教なしには行かれない。……「人」の研究，「人」に徹すること，それが真に神に帰依し，宇宙の根元に帰ることである。また神を把握し発見し，神に信頼し還元するにあらざれば「人」の発見は出来ず，自己を知ることも出来ないのだと思う。[25]」空想された幻影のイメージの人間ではなく，現実的人間になることによって，真の自我を発見することによって神との創造者との正しい関係が成立するのではないだろうか。

西田幾多郎も言っている，「宗教とは神と人との関係である[26]。」さらに「我々の神とは天地之に由りて位し万物之に由りて育する宇宙の内面的統一力でなければならぬ。このほかに神というならば，此の如き実在の根本に於て直に人格的意義を認めるとの意味でなくてはならぬ。又，我々はこの自然の根底に於て又自己の根底に於て直に神を見ればこそ神に於て無限の暖かさを感じ，我は神に於て生くという宗教の真髄に達することもできるのである。神に対する真の敬愛の念は唯此中より出てくることができる[27]。」

波多野精一は批判哲学の立場から宗教の本質を次のように定義づけている。即ち，「理性的価値を絶対的実在の顕現として体験すること，この絶対的実在に於て神聖と名づくべき方向と愛と呼べるべき方向とを合せ体験すること，私達自身に於て，超越的にして，しかも内在的

なる絶対的現実性そのものを体験すること[28]」である。ここに宗教の内在性と超越性という言葉がでてきたのであるが，小原はシュライェルマッヘルのいう絶対帰依感情には，「超越的と内在的との二つが含まれておる。[29]」という。つまり，「『最高者としての神を尊敬すること』と，『父としての神と自分が親縁であることを感ずること』との二事実がある。絶対者・最高者・第一原理，権威者・無限者でなければ帰依の念は起らぬわけである。同時に，あまりに近づき難き恐しき異質的な方でも困る。そこには肉親の親の如き父か母かの如き慈愛の力でなければ神や仏の慈愛に抱かれ得ないわけである。が，つまり宗教の本質は，この神に帰依し合一するところにある。神人の合一である。[30]」

宗教の内在性，超越性については次の「神について」の項で述べよう。

### Ⅲ．神とは

小原は言う，「永劫に動きのない宇宙の根本を把握しておればいいのである。主にありてだ。神様さえ摑まえておればへこたれないですむのだ。[31]」と小原はここで宇宙の根原(源)＝神としているが，西田が『善の研究』の中で言っていることと同じである。即ち，「神とはこの宇宙の根本をいうのである。神と宇宙との関係は芸術家とその作品との如き関係ではなく，本体と現象との関係である。宇宙は神の所作物ではなく，神の表現 manifestation である。外は日月星辰の運行より内は人心の機微に至るまで悉く神の表現でないものはない。我々は此等の物の根柢に於て一々神の霊光を拝することができるのである。

我々は自然の現象を研究すればするほど，其背後に一つの統一力が支配して居るのを知ることができる。

外は自然の根柢に於て一つの統一力の支配を認めるように，内は人心の根柢にも一つの統一力の支配を認めねばならぬ。人心は千状万態殆ど定法なきが如くに見ゆるも，之を達観する時は古今に通じ東西に互りて偉大なる統一力が支配して居る様である。更に進んで考える時は，自然と精神とは全然没交渉のない者ではない，彼此密接の関係がある。我々は此二者の統一の根柢に更に大なる唯一力がなければならぬ。……略……。

然らばかくの如き意味に於て宇宙の統一者であり，実在の根柢たる神とは如何なる者であろうか。精神を支配する者は精神の法則でなければならぬ。精神は単に此等の作用の集合ではなく，その背後に一の統一力があって，此等の現象はその発現である。今，統一力を人格と名づくるならば，神は宇宙の根柢たる一大人格であるといわねばならぬ。[32]」

この西田のいう神を一大人格と見なす場合，波多野精一が論ずる，「神の人格性」とはどのように結びつくのであろうか。

「神を人格として表象することは，殆凡ての生きた宗教の共通の特徴である。[33]」そして「神の人格性の問題と関連して重要なのは，神の超越性と内在性(transcendency and immanency; Transzendenz und Immanenz) の同一性の問題である。

現実の世界に満足せず，その苦悩，その無能力，その不完全を痛感して，それ以上の世界，一層高き実在に於て真の満足，真の幸福を求むることこそ真の宗教的要求である。

神の内在性のみに満足せず，世界と一ならざる神を主張するが，私達の承認する人格神論の特徴の一つである。[34]」

人格は有限であるのに神を個性のある人格と見なすのは何故か，無限であり絶対であるはずの神を一人の人格とみなすことの意義がここで明かにされたが，シュライェルマッヘルは果して神をどのように見ているのであろうか。

「シュライェルマッヘルは宗教を高次の実在主義だといった。もしその実在を神と呼ぶならば，神はすべての生ける宗教の信仰対象である。もし宗教から神を除くならば，それは結局人間の主観的一状態単なる気分ということに尽きる。信仰者にとって神は初めであり終りである。[35]」又，「シュライェルマッヘルの神は単なる超越者でもなければ，また単なる内在者でもない。客観的な実体としての神を語り得ないことを知った彼は，神を論ずることによって人を論じ，人を論ずることによって神を論ずる弁証法的方法以外の道を知らなかった。『孤立せる神』は彼にとって無に等しい。彼は神を論ずるために既に人を論じている。[36]」

小原の宗教，神のとらえ方はまさにシュライェルマッヘルのものではないのだろうか。

石井次郎は『シュライェルマッヘル研究』においてシュライェルマッヘルの『宗教論』だけを読んでも理解しえなかったところのシュライエルマッヘルの神について述べている。

「シュライェルマッヘルは信仰論36節以下で神について展開する『すべての宗教的感情の根本原理をここに定立し，これを完全に叙述しょうとすれば，次のごとき命題になる。即ち有限的存在の総体は，ただ無限なるものに依存することにおいてのみ存在するというのがそれである。』(36—1) 信仰者は，有限者として一歩一歩無限者の前に立ち，その絶対依存性の自覚を新たにすることによって信仰者たるのである。[37]」

「神は如何なる場所にも措定されないとともにまた如何なる場所にも在し給う。[38]」とシュライェルマッヘルがいつているように，西田も言う，「すべて我々の精神を支配する宇宙統一の念は神の自己同一の意識であるといってよかろう。万物は神の統一に由りて成立し，神に於ては凡てが現実である。神は能動的である。神には過去も未来もない。時間，空間は宇宙的意識統一に由りて生ずるのである。神に於ては凡ては現在である。[39]」

キリスト者は神が今なお私たちに，たえず働きかけ，呼びかけて下さっていることを信ずる。そのためには心の耳をすませ，傾けなくてはならない。

小原は神の超越性と内在性を主張する。この内在性が万有在神論へと展開されているのではないだろうか。小原は「超越性，内在性は論理的には矛盾のようだが，この超世界的，絶対的なものを個体としての吾吾の生命の深奥において体験し，永劫的で，常住的なものを，時の流動の中に体験するということ，これが概念的理解を超えた，即ち概念以前の知識以上の世界であって，宗教の根本的事実であり，これが宗教的体験の秘義 mystery である。[40]」といっているが，この神の超越性と内在性を解く鍵は何なのだろうか。汎神論の立場からすれば，「神の内在性は当然のことで，神を唯一の実在とする一元論とするが，これは自然主義の場合に，平等一如なる実在の中に万象を没入せしめ，永久不変なる法則以外に個性の特有の権利を承認しない。[41]」しかし，「何等かの意味，何等かの姿に於て，神の内在を体験しない宗教は要するに宗教の死骸であるに過ぎないだろう。かくして人格的生活がその頂上に登りつめ，心髄を最明らかに発揮したとき，私達が最もよく自らであり，己自らを貫き得たとき，私達は最自由であり，最独立であり得たとき，私達は最初に，また最親しく，絶対者の力をわが衷に体験するのである。……略……正しく比処に宗教的秘義 (mystery; mysterium) があるのではないか，超越的，絶対的なるものが個体の生命の深奥に於て，永遠的，常往的なるものが時の流動の只中に於て，如何にして体験されることが可能となるのであろうか。ここに私達はあらゆる秘義を見るのである。[42]」であると，ここに私は，小原が，シュライェルマッヘルから受けたのと同じ位，波多野精一の影響を受けていることを確認するものである。

この超越性と内在性について聖書を見るとまず神の内在性を現わしていると思われるものに，「あなたがたは神の宮であって，神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が，神の宮を破壊するなら，神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら，神の宮は聖なるものであり，そして，あなたがたはその宮なのだからである。[43]」「われわれは神のうちに生き，動き，存在しているからである[44]。」とがある。といってもここだけというのではないが，一方，超越性を現わしている個所として詩篇139篇（交読文32）を例にとってみよう。

「主よ，汝は我をさぐり，我を知りたまえり，
　　汝はわが坐るをも立つをも知り，また遠くよりわが思いをわきまえたもう。
汝はわが歩むをも我が臥すともさぐりいだし，
　　わがもろもろの道をことごとく知りたまえり。
そはわが舌にひとことありとも，
　　みよ，主よ，汝ことごとく知りたもう。
　　⋮略
汝のみまえには暗きものを隠すことなく，夜も昼の如くにかがやけり，
　　汝には暗きも光もことなることなし。
神よ，汝のもろもろの御思いは，我に貴きこといかばかりぞや，
　　その御思いのすべくくりはいかに多きかな。
我これを数えんとすれども，その数は砂よりも多し，
　　われ目さむる時も，なお汝と共におる。
神よ，ねがわくば我をさぐりて，わが心を知り，
　　我をこころみて，わがもろもろの思いを知りたまえ。
願わくば我に，よこしまなる道のありやなしやを見て，
　　我をとこしえの道にみちびきたまえ。」

聖書から神の内在性と超越性を学ぶということは不思議である。しかし，この内在性は小原のいう内在性とは少なからず異なっている。小原は個々のすべてが神を内に秘め，それ自身が神となるというのに対して，聖書はあくまでも上よりの働きかけであり，上よりの恵みであることを示しているのである。

シュライェルマッヘルは『宗教論』の段階では，宗教をイエス・キリストと結びつけることを明確にしていない。小原もまたイエス・キリストを他の宗教と同じように考えているようである。しかし，キリスト教は他の宗教とは本質的な違いを持っているのである。それはシュライェルマッヘルが言っているように，「キリスト教の信仰においては，一切はナザレのイエスに向って成就された救拯と結びついている点である。……

人はキリストなくして神の働きを知ることはできない。神の現実世界における活動とは，まさにイエス・キリストの活動自体を意味する。キリストは神の唯一の啓示である。[45]」

神の超越性と内在性を見ることによって，私たちはイエス・キリストについて考えなければならなくなってきたようである。

キリスト教はイエス・キリストを仲介者として神と私たち人間との関係が保たれているのである。そこには救主イエス・キリストの贖罪と救い，愛の生活があるのである。

小原はイエス・キリストについてはあまり論じていないが，次号では小原のイエス・キリスト観と，信仰等小原信夫人が小原に与えた影響について論及して行こうと思う。

### 引用文献・参考文献


小原國芳著
『教育の根本問題としての宗教』 玉川大学出版部 昭和55年版
『宗教教育論』 〃 昭和47年版
『塾生に告ぐ』 〃 昭和53年版
鰺坂二夫著
『小原教育』 〃 昭和50年版
西田幾多郎著
『善の研究』 岩波書店 昭和50年版
シュライェルマッヘル著 佐野勝也・石井次郎訳
『宗教論』 岩波書店 昭和50年版
R・オットー著 山谷省吾訳
『聖なるもの』 岩波書店 昭和43年版
H・オット著 沖野政弘訳
『神』 新教出版社 1975年版
波多野精一著『宗教哲学』
（波多野精一全集 第三巻）岩波書店 昭和42年版
石井次郎著
『シュライェマッヘル研究』新教出版社 昭和23年版
宮本武之助著
『波多野精一』 日本基督教団出版局 昭和40年版


### 注

(1) 昭和29年10月26日第8回日本基督教団総会制定。

(2) Panentheism 神と世界との関係について，有神論（人格神論）と汎神論を調和させようとする立場。すべての存在と出来事は神の中にあり，世界は神の現象であるが，神は世界を超越し，これを包括統一する絶対的精神的生命であると考える。汎神論のように神が世界の中に埋没消滅しないとみる点では有神論と同じ趣旨のものとみなされる。クラウゼがシェリング，ヘーゲル的汎神論に対抗するものとし自説をかく名づけた。」（日本基督教協議会キリスト教大事典編集委員会編『キリスト教大事典』教文館，昭和43年版 860頁。

(3) 小原國芳著『教育の根本問題としての宗教』玉川大学出版部 昭和55年版 345頁。

(4) (3)と同じ，25頁。

(5) 小原國芳著『塾生に告ぐ』玉川大学出版部 昭和53年版 470頁。

(6) 西田幾多郎（1870—1945）著『善の研究』岩波書店 昭和50年版 181頁。

(7) シュライェルマッヘル Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher (1768—1834) 著 "Uber die Religin, 1799"，佐野勝也・石井次郎訳『宗教論』岩波書店 昭和50年版 12～14頁。

(8) (7)と同じ，38頁。

(9) (3)と同じ，27頁。

(10) (6)と同じ，184頁。

(11) 波多野精一（1877—1950）著『宗教哲学』（波多野精一全集，第三巻）岩波書店 昭和24年版 49頁。

(12) (6)と同じ，272頁。

(13) (7)と同じ，49頁。

(14) (6)と同じ，186頁。

(15) (7)と同じ，54頁。

(16) 石井次郎著『シュライェルマッヘル研究』新教出版社 昭和23年版 130頁。

(17) (7)と同じ，59頁。

(18) R．オットー Rudolf Otto (1869—1937) 著 "Das Heilige, 1936"，山谷省吾訳『聖なるもの』岩波書店 昭和43年版 20頁。

(19) (18)と同じ，35頁。

(20) (18)と同じ，21頁。

(21) この（R151）というのは石井次郎著『シュライェルマッヘル研究』の中でシュライェルマッヘル『宗教論』を引用した際の頁である。

(22) (16)と同じ，131頁。

(23) (16)と同じ，132頁。

(24) 小原國芳著『宗教教育論』玉川大学出版部 昭和47年版 30頁。

(25) (24)と同じ，31頁。

(26) (6)と同じ，186頁。

(27) (24)と同じ，189頁。

(28) (11)と同じ，48頁。

(29) (24)と同じ，38頁。

(30) (24)と同じ，38頁。

(31) (5)と同じ，274頁。

(32) (6)と同じ，192～196頁。

(33) (11)と同じ，53頁。

(34) (11)と同じ，58頁。

(35) (16)と同じ，159頁。

(36) (16)と同じ，170頁。

(37) (16)と同じ，171頁。

(38) (16)と同じ，182頁。

(39) (6)と同じ，197頁。

(40) (24)と同じ，47頁。

(41) (11)と同じ，61～62頁。

(42) (11)と同じ，63頁。

(43) コリント人への第一の手紙 第3章 16～17節。

(44) 使徒行伝 第17章 28節。

(45) (16)と同じ，207頁。